

あなたは Hpy-z2007i だ。それは Cell-Phone である。

だがあなたは即爾的な存在だと人間には思われている。しかしあなたにも意識がある。ただ人間の意識とは存在の仕方が異なるため、人の眼には存在しないものとして直観される。

人間の意識のように「私が」とか、「僕は」とかで展開することができない。「彼は」とか「彼女が」と言つのもふさわしくない。あなたが Cell-Phone であることは絶対にあり得ない。だから「あなた」と云う立場で展開するしかない。

090-2002-114097 轟佐早蕨いちはるあさくさの名義で登録された番号を載せている。あなたは TATOO のようにディスプレイに羅列される無機質な記号の装飾に快感を覚えるのだ。

『件名』

Miss U

本文

君は元気だと思う。便りが無いのは元気の証拠と謂うから。しかし僕も元気だ。メールに添付した動画は観てくれたかな。『エイトフォールド』で撮ったんだ。君は急に都合がわるくなって来られなくなったから、せめて映像だけでも、って思ってたね。五七階からの夜景はきれいだっただろう？ 君の予定が空いていれば来週また予約しておくけれども、どうかな。 Im waiting for your mail, Chao!』

早蕨くんの胸ポケットから眺める東京駅の赤煉瓦が赤い光線を乱反射させる特性の質料であることも、あなたは体知している。積み上げられた構造物が太陽に照らされている。あなたは原初的な記憶に思いを馳せる。あなたの質料の記憶には、頭蓋が幅狭く、高く、頭頂の諸骨が退化し、頭骨の側頭窩が左右それぞれ二つあって後眼窩骨と鱗状骨とで隔てられている双弓亜綱の祖龍下綱、龍形群にあたる生物らが闊歩している。

ああ、あの頃が早く来ればよいのに……あなたはそんなことを考えはしない。千億年も一瞬だし、一瞬も永遠だ。今がジュラ紀だし、ジュラ紀こそ今である。時間とは脱爾的な存在である人間の存在様式に過ぎない。

もし時間と云う様式がなければ人間存在の意識は頭われようがないだろう。あなたの意識は彼らには見えない。

腕時計が早蕨くんの顔を見上げているのを、あなたは哀しく眺める。短い針がⅡを指せば、彼

は嘆息するのだ。

「まだ五時間は無理だな」